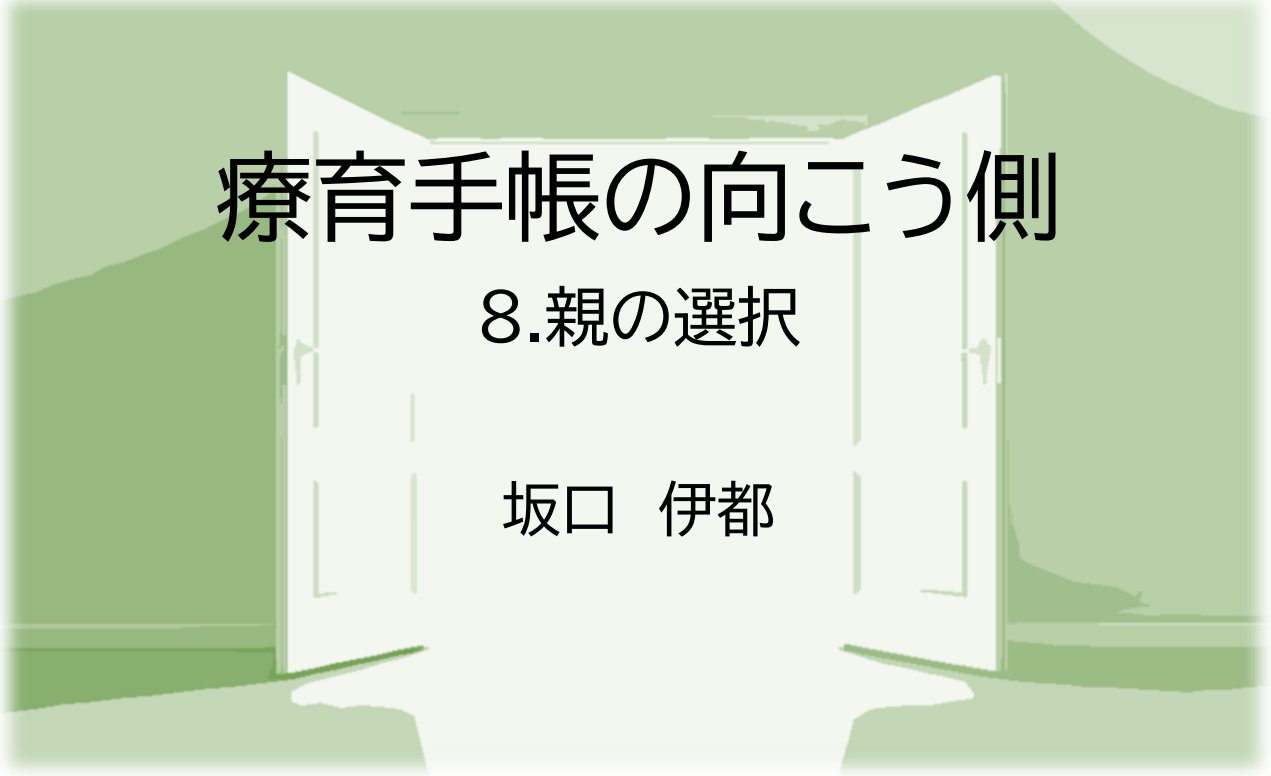




療育手帳の向こう側

8.親の選択

坂口 伊都

はじめに

前は、「迷惑」について書きました。迷惑と助け合いは紙一重。人に迷惑をかけてはいけないからとお互いを遠ざけるのが良いのか、人は一人で生きていけないのだから他者に手を伸ばして生きるのが良いのかと尋ねられれば、後者を選択したくなるのではないのでしょうか。そこに知的なハンディキャップが加わると、意思疎通がスムーズにいかないからと敬遠されることがあります。学校等の集団行動の場で一斉指示では伝わらず、手をかけて説明をしなければならぬので周りを待たせてしまうと言われれば迷惑をかけてしまうと縮み上がり、自分だけがわからない、周りに馬鹿にされる、自分が悪いのだと自尊心を損ねていくことが起こり得ます。

スケジュールにそって動けないと林間学習での泊まりは難しいと言われた子がいました。その子は、用意していた着替えではなく、予備で入れていたものを着て何とかやりくりしてきました。慣れない場所、心細さもある中で試行錯誤をしてやってきたのは、その子の大きな頑張りです。

その一方で、大人と一緒に荷物から着替えの服を探す手伝いをするのは、難しいのだろうかと考えてしまいます。細かい事情がわからないので何とも言えませんが、周りにいる人に頼んだら助けてもらえるという体験は、世の中を信頼する第一歩となります。しょうがいがある子だけでなく、どの子にとっても周りには助けてくれる可能性があるを知っていくことが重要で、それが大人の責務ではないかと思います。

今回は、親の選択について取り上げます。療育手帳の聞き取りの場で、母ではなく父が子どもを連れてくることが増えている印象を受けます。総数でいえば母が子どもを連れてくることが多いですが、父母で来所される方も一定数います。中には父子家庭で、父が仕事をしながら家事と育児を担っている家族もありました。

援助者「仕事もして、毎日の夕ご飯も作っているのですか？」

父親「はい、大したものは作ってないです。同じようなものばかりで」

援助者「いや、大したことですよ。」

父親「子どものためですから」と言いながら頭を掻かれていました。

母性本能という言葉はよく聞きますが、子どもを守ろうとする父性もあるのだと感じました。女性なら必ず母性本能があるとは思っていませんし、家族を捨てて出て行く親もいますが、不器用そうな父親が慣れない家事に奮闘されている姿に頭が下がります。穏やかな父から、子どもを守り育てたいという決意が伝わってきました。その一つが晩御飯を自分で作ることなのでしょう。

家族が別に住む選択

家族の状況を記す書類に、同じ苗字で父親が別居していると書かれていることがあります。理由は離婚調停中、病気療養中、単身赴任等が考えられます。単身赴任と記入されず別居とだけ書かれていると、夫婦の不仲が原因なのかと想像してしまいましたが、「お父さんは別居なのですね」とお聞きすると、意外な答えが返ってきて、家族の印象がガラッと変わる瞬間があります。

ある家族は、母と子どもで引っ越してきて父は別居と記載されていました。離婚予定で実家の近くに引っ越してきたのだろうかと思っていましたが、

「父親は、転勤先に残って仕事をしています。〇〇支援学校にこの子を入れたくて母子で引っ越してきました」と言われ、意外な返答に驚きました。

転勤先の支援学校は重度しょうがいの子どものが多く、なかなかコミュニケーションが取りにくそうだと危惧していたそうです。〇〇支援学校には似たタイプの子どもの複数いて、この子にとって過ごしやすい環境だろうと感じ、引越しを決め、週末に母子で父に会いに行っています。「子どもが喜んで電車に乗れるからちょうどいいのです」と教えてくれました。

単身赴任は、戦後の高度成長期頃から企業の全国展開が可能になったこととマイホームを持てるようになり、父親だけが新たな勤務地に赴くことが増えたといわれています。日本はいろいろな経験を積むことで社内のキャリアアップをしていくため、人事異動を受け入れざるを得ない仕組みがあります。アメリカ等では転職が一般的で単身赴任という形になりにくいようです。

私の子どもの頃、父親が転勤族で、何度も転校したという話は珍しくはなく、転校生に憧れたことを

思い出します。実際は、友達関係が出来上がっている中に飛び込むしんどさがあると聞き、冷静に考えれば当然だとわかります。今も転校を繰り返す子どもはいるでしょうが、父が単身赴任をする話の方をよく耳にするようになりました。

単身赴任を選択する際、悩みに悩んでの決断なのではないでしょうか。住居が2か所になれば、金銭的負担もかかり、家事はそれぞれしていかなければなりませんし、子育ても片方が全面的に担う必要が出てくるからです。人事が家族より上位にあり、家族が振り回されている印象を受けます。

人事異動で家族が離れる際、父が一人で移動することが当たり前だと思い込んでいて、母子で移動する選択肢もあるのかと驚きました。子どもの経験を増やし、父の疲労感を軽減させ、母の家事負担も軽減しているようでした。また、新たな父の転勤が告げられれば、今の形は変化せざるを得ません。その時もまた、自分たちにあった選択を考えていくのでしょうか。



家族と一緒に住む選択

転勤や転職に伴って、家族で引越をする選択もあります。ある子どもさんは、新しい場所や知らない人と会うことが苦手で、引越し後の子どもの状態を心配し、何度も新しく通う学校までドライブを繰り返し、馴染みの場所にしていました。「子どもはドライブが大好きで、遠距離ドライブでも機嫌よくしていたので何度も出かけることができました。親の方は身体に堪えましたが、苦労した甲斐がありました」と笑っていました。

また別の家族は、父の職業が農家に変わっていました。無農薬製法のお米を作っているそうで、「作るのは大変ですが、できると皆が美味しい、美味しいって言うてくださるのです」と嬉しそうに話されていました。

前にお会いした時は、子どもとの関係の取り方がわからなくなって母子ともに俯き加減でした。その当時は、私の子どもはあれもこれも「できない」と嘆き、子どもに「しょうがい」と告げることを恐れていました。子どもは母の隣に座らず、部屋の隅に座って他者との距離を取り、社会そのものを信じていない様子が伺えました。

今回は、母から「子どもにできることが増えました」という言葉が真っ先に出てきて、母の表情が柔らかくなり、子どもの方もにこやかな表情で母の隣に座っていました。前は、父と子どもが交わる話題が出てこない印象だったのですが、今回は子どもと一緒に農業をする話題があり、親子で過ごす時間が増えていることが伝わってきました。

「できない」という前提で子どもを見ていると、子どもに直接言わなくても親の表情や放つ空気で感じ取ります。できることが増えたと語る母、子どもとの時間を持つとうとする父の背中が、この子に力を与えることだと教えられました。

母を労うと、前にお会いした頃が一番しんどい時期でしたと涙ぐみ、子どもが進学を機に積極的になっていき、自信を深めていった様子を聞かせていただきました。そして今後、何が子どものためになるのか悩んでいると相談を受けましたので、子どもの力が発揮できた環境について尋ねました。すると、学校での配慮があげられました。

子どものペースにあわせてもらえた
少ない人数の中での活動
そして、誰かの役に立っていると感じられた経験をした

という辺りがポイントになったようです。今後もその環境を作って行けそうな場所について話し合っていくと母の中で見通しが持てたようで「モヤモヤしていたものが、スッキリしました」と肩を撫でおろし、さらに優しい眼差しになっていくのが印象的でした。

選択していく力

日々の生活でトラブルをなくすこともできませんし、子育てに悩みが尽きることはありません。子どもが学校に行けないと、多くの親は心配します。

周りと同じように学校に行けなくなったら、将来どうなるのか心配だ。最初に頭に浮かぶのは、この辺りのことでしょうか。ここから、何とか学校に行かせようとするためにあなたなら何をしますか。まずは、「明日も学校なのだから、早く寝ないと朝起きられなくなるよ」と声をかけても、朝になると調子が悪いと行き渋る。

さあ、どうしましょうか。やはり学校に行かせないと世間の波から置いていかれるから何とか行けるようにしなければと頑張りますか、あるいはいじめられているのではないかと、担任との折り合いが悪いのではないかと行けない理由を探しますか。

学校に行けない理由が、インフルエンザに罹った時のウイルス検査のように一つの理由で起きているわけではありません。いじめを受けていることがわかり、加害者が謝罪する形になったが、次からは大人にばれないより陰湿な形に変わっただけだったという話をよく耳にします。いじめというと加害者と被害者がしっかりと別れているような印象を持ちますが、実際は加害者と被害者が入れ替わることもあります。人間関係の中で起きる現象ですから、複雑な人間関係の



様相をしているものです。

でも、私たちは何か原因があり、それを取り除けば良くなると信じたくなります。上手くいかない理由を考え取り除こうしても、状況が良くならない経験を繰り返しても、別の理由を探そうとする。これは、人の思考の特徴だと言われているので、思考の癖だと言えます。

ある家族面接で、中学生の子どもが「学校に行けない」と相談に来られた際、話をしていく中で「今は、学校に行かずに休む時期にしよう」と決断をしました。「大学に進学をしたければ、高卒認定試験取得の道もあるし、高校に行きたくなれば行けばいい、今できることは何かを一緒に考え、できることを行動して行こう」と父親が話しました。まずは家族共通の趣味、「道の駅巡り」に出かける計画から始めていました。家族で「学校に行かない」と決めると罪悪感が減少し、家族が笑顔で話をしていくようになっていました。

会社からの人事異動を受け、家族の暮らし方で変化を迫られた場合、何を優先するのか。ここで紹介した家族は同じ選択をしたわけではありませんが、世の中の当たり前をそのまま飲み込むのではなく、家族に合わせた選択を実践していきました。能動的に動くと行動に責任を持つようになり、悲観しくなくなります。前を向いて生きる親の姿は、子どもにどう映り、どう影響していくのか今後が楽しみになりました。

